

真の防災拠点作りを(1995年3月号掲載・志井 秀樹)

このたびの震災に際して、消防職員個人個人は、それぞれの能力の200パーセント、300パーセントを発揮し、活動した。自らの使命感と市民の要請に駆り立てられ、体力の限界をはるかに超えた活動であった。

しかし、そこまで頑張った職員の心に、共通した無念さが充満していると思われる。

「水があれば」「人員が豊富なら」「スムーズに部隊運用ができれば」「情報が早く、正確に伝われば」「資機材があれば」など、個々の力ではどうしようもない事態に直面し、口唇を噛み、悔し涙を流したに違いない。

将来、この神戸市を同程度の災害が襲った時、今回より一人でも多くの命を救うため、施設、装備面と組織面の両面で強化を図り、真の防災拠点を確立する必要がある。

「施設、装備面」で特に強く感じたのは、

- (1)災害に強い庁舎
- (2)ユンボ・クレーン等重機の配備と調達ルートの確立
- (3)資機材庫の充実

以上の3点である。

「災害に強い庁舎」については、生田、葺合両本署の崩壊に象徴されるが、灘消防署においても、地震が発生し、激しい揺れが治まるのを待って状況を確認しようとするが、停電により思うにまかせず、待機室の出口まで手さぐりで辿り着くと、ドアが開かない。やっとの思いでドアを開けると、更衣用ロッカーがすべて倒れて一つひとつ起こさないと先へ進めず、ガレージへ通じるドアに手を掛けると、また開かない。ガレージへ出ると、ヘルメットや防火衣が入っているロッカーがすべて倒れ、消防車や救急車に倒れかかっており、ヘルメット、長靴、防火衣などが表の道路にまで散乱する有様であった。そして隊員は、暗闇の中で見つけたありあわせの装備で多発する火災の現場に向かったのである。

その後、指揮本部、応急救護所、臨時給油所、非常招集者駐車場、応援消防本部車両の駐車場、休憩所、仮眠室、救援物資置場等々想像をはるかに超える臨時スペースが必要となったが、署のガレージや中庭をすべて使っても対応できるものではなかった。

消防署が災害の拠点となるためには、あらゆる意味で自給自足が可能な要塞であるべきだと思う。

「ユンボ・クレーン等の重機」についてはある程度の台数を神戸消防も保有し、大量に必要となった場合の調達がスムーズに行われるより、調達ルートの確立が急務である。

救助現場に到着し、重機がないためあきらめて、後まわしとなった現場がどれほどの数にのぼるか、水が無かった消火作業と共に悔やまれる点である。

「資機材庫の充実」は、消防職員、団員が使用するだけでなく、今回の災害では市民から「スコップを貸してくれ」「バールは無いか」「ジャッキが必要だ」との声が多かった。

多くの市民が、家屋の下敷きになった人を自分たちで救助しようとしたが、道具がなく、手をこまねいたケースが多発した。

そのためにも、従来の水防倉庫と同様のものを市内各所に置き、災害時に自由に使用してもらいようにすればと思う。

3点以外にも、隊員間連絡用無線や耐震防火水槽の増設も重要と思われる。

「組織面」においては、

- (1)職員数の不足
- (2)指揮隊の重要性
- (3)専任救助隊の各署配置
- (4)局編成による情報収集隊の各署への派遣

以上4点が必要と感じた。

「職員数の不足」は(2)(3)とも関連してくるが、今回の震災で団員の方が1名過労死される事態が発生し、マスコミは不眠不休の活動を大々的に報じ、ある意味で「美談」として取り上げたが、いかなる災害であっても生身の人間が仕事をする以上、不眠不休であってはならず、ましてや「美談」

など有り得ないと思われる。大きな災害であればあるほど適正なローテーションで現場活動が実施できる人員の確保が必要であろう。

「指揮隊の重要性」「専任救助隊の増隊」は、以前からも課題としてあがっており、今回改めて痛感した項目である。

「局編成による情報収集隊の各署への派遣」も人員不足によるところであるが、局が情報を要求してきても、それに応えるべき人員が無く、局の各セクションの要求内容もつかみきれないため、災害対応の一手段として取り入れてはどうかと思う。

その他反省点をあげれば、きりが無いほどであるが、多くの消防職員、市民の方の声を聞いて、災害の無い街の、真の防災拠点作りを願うしだいである。